日本薬学会第 125 年会
ランチョンセミナー5

日　時：平成16年3月30日（水）　12：30～13：30
場　所：東京ビックサイト　1 階　（B 会場）
〒135-0063　東京都江東区有明 3-21-1　TEL　03-5530-1111

PROGRAM

いまキノロン薬の個別化を考える
－安全性・薬物相互作用を中心に－

＜司会＞
共立薬科大学　　実務薬学講座　教授　木津純子　先生
＜演者＞
東京慈恵会医科大学　薬理学講座　　教授　堀　誠治　先生

こんにち，多くの抗菌薬が感染症治療に用いられている．耐性菌対策から，また治療効果上昇の立場から，抗菌薬適正使用が叫ばれている．その中においても，安全性・薬物相互作用に関しては，系統別の把握が多いのが現状であろう．今回は，安全性・薬物相互作用に関する成績を見直し，キノロン薬などの個別化を考える．同時に，問題点の抽出も試みる．

キノロン薬が，多彩な副作用を有していることは良く知られている．その中で，投与量（濃度）依存的な副作用の発現を防止するためには，キノロン薬の体内蓄積をきたさないようにする必要がある．キノロン薬は主に腎より排泄される薬物とされているが，腎機能低下時の血中半減期の変化（延長）は薬物により異なっている．

また，多くのキノロン薬添付文書で，併用注意となっているテオフィリンとの薬物相互作用を見直すと，キノロン薬により相互作用の強さに差のあることが明らかとなっている．また，併用禁忌ないし併用注意とされているものが多いキノロン薬・非ステロイド薬の薬物相互作用においても，その薬物相互作用の強さは，キノロン薬により，また，キノロン薬と非ステロイド薬の組み合わせにより異なることが示されている．

そこで，キノロン薬を用いて，感染症患者を安全かつ効果的に治療するには，これらは必須の情報となろう．本セミナーでは，安全性・薬物相互作用に関する情報を，われわれの成績も含め見直し，これらの薬物の個別化を考えることとする．また，薬物相互作用による副作用発現の可能性の低い薬物（薬物の組み合わせ）の有無についても考えてみたい．より安全で効果的な感染症治療をめざして．

共催／日本薬学会第 125 年会
第一製薬株式会社